

株式会社 OSR
代表取締役

大崎 純



若かりしころに抱いた憧れを仕事への誇りに昇華させ、
25年以上も建設現場に立ち、現場を職人として下支えしてきた大崎社長。
16歳で現場を取り仕切る立場に手を挙げるなど上昇志向が強く、
やがて独立の道を選ぶと、会社を設立して現在は若手の面倒も見る。
好奇心旺盛で常にアンテナを張っているという社長は、
今後も現在の事業に留まらず、チャンスを見逃さず挑戦していく。

**「悔しい想いはバネにし、上を見てきた。
チャンスを逃さず挑戦し続けたい」**

建設事業を下支えする仕事に誇り 向上心と責任感で現場に立つ



special
大崎 純
代表取締役
interview
タレント
ラッシャー板前



建設現場において、重量物の揚重運搬配置工事や機械器具設置工事などを手掛ける『OSR』。10代半ばの若さで建設現場に入るとなると、25年以上に渡って数々の現場に立ってきたベテランだ。約6年前に同社を設立し、若い従業員も確保しながら組織基盤を築いている。本日はそんな同社をタレントのラッシャー板前氏が訪問し、社長にその歩みや組織づくりなどについてお話を伺った。

——早速ですが、大崎社長の歩みからお聞かせください。

若いころは、やんちゃでしたね(苦笑)。ただ、中学生のころには「将来は建設業に従事したい」ということだけは決めて

いたんです。高校には進学したものの、大人しく机に向かうタイプではありませんでしたし、社会に出たらやりたい仕事も決まっているのなら勉強する必要があるのかと尚更、身が入らず、16歳でこ

の業界に入りました。

——同級生たちは学生で遊びたい盛りでしょう。それも特に厳しい建設業界に飛び込まれるとは。

最初に従事したのは解体の現場で、体力とスピードが求められる現場ですから、仕事に就いてすぐ想像以上に厳しい世界であることを思い知り、1週間が経つころにはすでに後悔をしていましたね(苦笑)。それでも、2年ほど続けたんです。もともと体格も良いほうではありませんし、力もなく、それが悔しくて仕事の前後に毎日筋トレに励んで身体を鍛え、徐々に体力がつくと仕事も楽しくなってきました。

——早くに社会に出られた社長のことで、独立を目指されたのも早くて？

21歳の時には、いずれは独立したいと勤務先に伝えました。そしたら、関西に出す支店のトップを任せたいと言っていたのですが、当時は若かったこともあって友人たちがいる地元を離れる勇気を持ってなくて、すごく悩み葛藤した結果、お断りしました。もしその話を受けていたら人生が変わっていたらと想像することがありますし、大きなチャンスを逃してしまったという後悔も残りました。それでも、約8年間勤務する中で多くのことを教わり、どこの現場に行っても職人として負けていないという自信も得ました。若かったので最初は「若いのに、本当に大丈夫なのか？」という目で見られても、1日が終わるころには自分への評価は変わっている。それを肌で感じていました。

——年齢ではなく、実力を認めてもらえたということですね。

単純に解体の現場が好きだから、自然と奮闘できたんです。何度か解体業界を離れて別の仕事に就いたこともあったのですが、やはり解体の現場が面白いんですよ。毎回、この業界に戻ってきてしまうので、自分には天職なのだと思います。

——もともとは21歳の時に独立宣言をされたわけですが、こうして独立されたきっかけは何だったのでしょうか。

個人事業主のもとで働いていた時、従

業員が自分一人しかおらず、このまま働き続けるなら自分も独立したほうがいいんじゃないかと考えるようになったんです。「辞めるならうちに来ないか」と声を掛けてくださる方もいたんですが、一念発起して30歳の時に独立を果たし、重量物の揚重運搬配置工事や機械器具設置工事を手掛ける『OSR』を設立したんです。子どもに恵まれたタイミングでもあったので、一家の大黒柱として腹を括ろうと決断できたのかもしれない。

——いよいよ経営者として歩みはじめられ、いかがでしたか。

勤務時代から人をまとめる立場を経験していたので人材の扱いにも多少の自信はあったのですが、実際は思うようにいきませんでした。初めて入ってきてくれた子には、気合いが入りすぎたのか、厳しくしすぎました。自分では愛情を持って接しているつもりでしたが、相手にはそうは伝わってなかった。自分の指導方法について反省しました。ただ、逆に気を遣いすぎて友人関係のようになってしまうと、馴れ合いになって甘く見られてしまう。私は不器用なんだと思います。その匙加減の難しさや、自分はマネジメントに関しては未熟だなと痛感しましたね。

——いや、人材育成に頭を悩ませる経営者はとても多いですよ。社長に限ったことではありません。

現在は、現場を任せられるようになり、それを機にすべてが少しずつ良い方向に

動き始めています。以前は、任せるのはむしろ無責任だと思っており、なかなか人に任せることができませんでした。それに、私自身が16歳でこの業界に入ってから周囲に育ててもらったので、一から育て上げないと気がすまない性分です。でも、自分のやり方では人がついてこず、定着しない。時代も変わっていますから、私のやり方や考え方を変えるべきなのだと、任せることにしたんです。

——任せることで従業員の責任感が生まれるなど成長にもつながりますよね。人に恵まれると、守る立場である経営者としてのプレッシャーも増えますが。

独立当初は元請け先から突然、「仕事が空いたから休みにしちゃおうね」と言われ、不安を抱えていました。その点、当社は仕事が途切れませんし、それが当社の強みです。従業員や協力会社が安心して働けるよう仕事を確保し、また周囲とWin-Winの状態を築くことで良好な関係を大切にしたいと考えています。

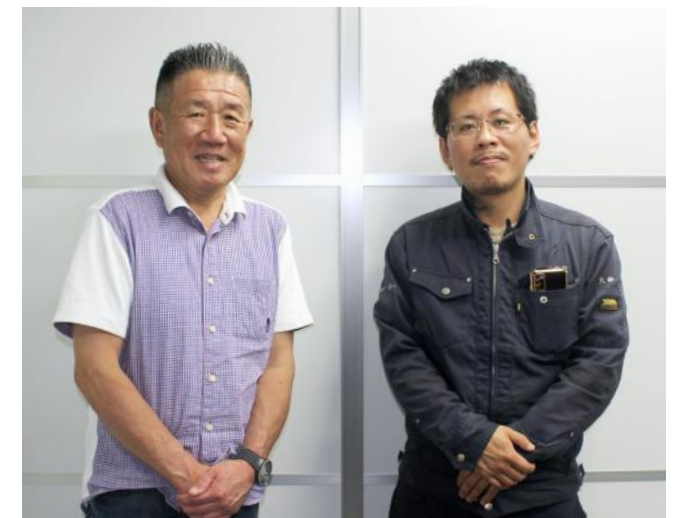
——今後については、いかがですか。

他の事業にも関心があり、現在の事業の基盤をより強固にして誰かに任せられる体制と環境を整えられたら、自分は新しいことに挑戦したいですね。好奇心旺盛で常にアンテナを張っていますし、興味があることには挑戦したい性分なので、チャンスは逃さず挑戦していきたいですね。

——本日は、ありがとうございました。(2023年6月取材)

16歳で職長を経験した若かりしころ

▼16歳で解体工事に従事するようになった大崎社長。半年ほどが経つころには要領を掴んだ。将来進む道を決めたのも早く、独立心も強かった社長は、職長として現場に入ることを希望し、社長に直談判する。10人ほどを引き連れて現場まで行くが、「16歳の若造の言うことなんて誰も聞いてくれませんでしたね」と当時を振り返って笑う。スマホで地図を簡単に出せる今は違って、住所や紙の地図を頼りに現場へ出向いた。スムーズに現場に到着できないと、「何やってんだ!」「お前でも本当に大丈夫か?」と皆が口々に言ったという。信頼は一朝一夕で得られるものではない。でも、若いというだけで頼りないと思われるのは悔しい。「だから、仕事を通して認めてもらおうかな」と思って、一生懸命に率先して仕事に励んだ。そのうち、周りの自分を見る目が変わっていき、ついてきてくれるようになったんです」と続ける。今、社長のもとでは18歳の従業員が働いている。「彼ぐらいの年齢で頭を張らせてもらっていたんだなと思うと感慨深い」と社長。現在、36歳——業界経験豊富なベテランだがまだ若い。今後の活躍にも期待だ。



「中学生時代にはすでに、いずれは職人の世界に入ると決めておられた大崎社長。『動機はすごく単純で、作業着姿に憧れたからなんです。中学生時代にすでに作業着を着て自転車で走り回っていたから、見かけた職人の方々は笑っていたでしょうね』と振り返られました。動機はともかく、その職人の世界で経営者にまでなられて立派です!」
ラッシャー板前・談

works >>>

重量物の揚重運搬配置工事業
機械器具設置工事業
空調電気衛生設備解体工事業
各種プラント機器メンテナンス工事業
工作機械ライン移設工事業
鷹工事業一式
前各に附帯または関連する一切の業務

株式会社 OSR

埼玉県春日部市緑町 4-12-26 うえる 103